



東高だより ーはなみずきー

第59号
(H24.1.12)

「食は国力」

いつも泊まる2つ星のホテル。朝食はバゲット2本に紅茶かコーヒー。マーガリンとジャムがついている。パリに行くとこのホテルに泊まる。4つ星の豪華絢爛なホテルと比べたら木賃宿程度。でも、断っておくが私の懐に見合ったもので、私の基準に照らせば4つ星に匹敵する。部屋はきれいでお湯もたっぷり出る。ささやかながら朝食も付く。値段はというと、1泊朝食付きで4,000円を少し切る。パリのことだから他にも素晴らしいホテルはいっぱいある。けれども他のホテルに泊まろうとは思わない。それはこのホテルにいろいろの思い出があるから。それだけだ。男も女も長く生きてりゃ一つや二つ思い出はあるもの。

最初パリに着いたときヘトヘトで腹ぺこだった。ドーナツをむさぼり食って安宿探しとなった。パリ北駅界隈はちょっとごたごたしている。楽しくもあるが、夜になると様相が少し怪しくなる。腹は少しなりとも膨らんだが、とにかく眠りたかった。真っ白なシーツに横たわって。で、北駅正面左のレストランを曲がって少し進むと、安ホテルがあった。もうどうとでもなれ、そんな気持ちで飛び込んだ。それがそのホテルとの出会いだった。以後、パリを訪ねるとき、私はそこにしか泊まらない。

丸1日半くらい眠りに眠った。起きるまでリネンの交換は不要と言ってあった。2日目の朝、受付と食堂が兼用になった小さなホールに降りていった。注文したのはありきたりだがカフェオーレ。運ばれてきた朝食はフランスパンのバゲットが2本。

コーヒーにミルクをたっぷり注ぎ、斜めに切られたバゲットを手でむしり、マーガリンを塗って口に放り込んだ。固いフランスパンの中はふんわりと柔らかかった。パンの皮が歯にパリパリいい音を立てた。噛むほどにパンの香ばしい甘さが口に広がっていった。ゆっくりカフェオーレを喉に流し込んだ。まるやかな甘さが疲れた体の細胞にすんなり入ってきた。これが本場のフランスパンか。

私が味わった最高の贅沢、それがフランスパンのバゲットだった。もう随分と昔になるのに、あのときの味を忘れることができない。以後、35年以上の歳月が流れたが、ホテルのバゲットの味は変わらない。私の思い出と同じように。変わったのはホテルを訪れる私の風貌。随分と歳を取ってしまったものだ。あと何度このホテルを訪ねることになるのか。もしかすると今年で最後。いつもそんな気持ちでここに来る。

私はパリのカフェの賑わいが好きだ。真っ昼間からワインを飲んでも誰も白い目で見ない。何を食っても誰も軽蔑しない。冬の寒さにもオープンカフェが似合う。コートの際を立ててコーヒーを飲んだりワインを飲んだり。街角を通り過ぎる風に詩が舞う。落ちる雨に落とした思い出を拾い集める。

石畳に心和む。街角の椅子にそっと腰を降ろし、ちょっと気取ってグラスワインを注文してみた。そうだ。忘れてた。久しぶりにふわふわのオムレツでも頼むとするか。この国では何を食べてもおいしい。さすがフランス。ヨーロッパでもグルメの国といわれるだけのことはある。食べることが人々の楽しみ。飲んで、唄って、踊って、これはイタリアか。でもフランスも同じ。

私は食べることにあまり興味がない。そりゃあ人生の最大の喜びの一つを忘れてるね。こんなふうに食いしん坊の友達に言われた。俺は太りたくないだけさ。そう答えた。果たして食べることにどんな意味があるのか。食べなければ生きて行けない。そんなありふれた答えじゃなくってもっと人間の根源的なもの、つまり人生との関わりみたいなもの、そんなものがないのか。ちょっと探してみたい。興味ある。

イギリスにいるときはすっかり諦めていた。何を？ 食事。そうイギリス最上の人には悪いが、イギリスの食事はまったくもって食欲を減退させた。今はどうか知らない。ロンドンも多国籍のレストランで賑やかと聞く。食事のことをイギリス人の知り合いに言うと、「まあね。認めるよ。でもイギリスにだってローストビーフという最高級のものがあるよ」と言われた。私に言わせれば「ケバブ」の方がうまいと思うが。

今回は結構いろんなものに手を出してみた。あんなもの女と子どもが食べるもんさ。そう思っていたものにまでトライした。するとどうだ。これがうまいのだ。クレープなんか日本と違ってもちもちとしていて病み付きになった。マカロンにも挑戦した。マカロンにも大きさがいろいろあるのに吃驚。大きいものになるとどら焼きくらいの大きさがあった。味もそれぞれ。なるほどご婦人方がマカロン、マカロンと言うわけだ。

で、食って考えた結果は？ う〜んそうだな。食は国の力、かな。日本料理に勝る料理はないと思っていたが、フランス料理もまんざら悪くないね。食は文化。そして食は力の源なり。

